

教 仏 名 聞

第72号
(発行日)

2016年9月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

同 悲 同 苦 に 導 か れ て

小学校五年生の時だったと思います。クラス担任の先生は非常に教育熱心な先生でした。あるとき同じクラスのT君がどうい理由か知らないけれど、先生にひどく叱られ、竹のムチで頭をバシツと叩かれたのを見ました。その時、バシツという音と彼の痛そうな顔、それを見た時、「ああ痛い、かわいそう」という気持ち起こりましたが、その時の「ああ、痛いだろう」という気持ちが今も脳裏に残っています。六十年以上も前のほんのささやかな出来事でしたが。

他者が叩かれて痛がっているのを見て、同じような傷みを感じ、「ああかわいそうだ」という感情が起こる。なんでもないようなことですが、この原始感情、原始感覚、これが慈悲心の元ではないでしょうか。冬の寒い日に地下街を歩いているとホームレスが寒そうにうずくまっています。それを見て、一瞬「ああ寒そうだ、かわいそうだ、なんとかした

い」という気持ちが起こる。かといって何もせずに通り過ぎてしまうのが通常ですが。こういう気持は人間だけではなく、猿にもあるらしく、お腹を空かせている他の猿に自分の食べ物を分ける猿がいることを、猿の研究で観察されていてTVで放映されました。

こうした他者の苦しみや痛みを見て、それを少しなりとも同じように感じる、それを仏教では同悲・同苦といい慣わしています。それが慈悲心の原形であると思います。凡夫である私にもそういう同苦同悲の感情が極めてささやかであっても起こる時が、時々あります。もしこの心が非常に深まり、広くなり、しかも実際のはたらきとなって活動する、それが仏や菩薩の慈悲行といわれるのでしよう。阿弥陀仏はその代表的な仏であり、窮まりなき慈悲心の仏として、生きとし生けるも

のの苦しみに共感し、その苦しみを救わんとして実際にはたらきかけて下さっています。それが今、南無阿弥陀仏のお念仏となって私に現れて下さいます。

一方、小さな同悲同苦の感情が心の中にありながら、主義や主張や善悪といった思考がゆがんだうえに肥大化し、それが行動なって現れることがあります。そうになると、ゆがんだ思考が、他者の痛みや苦しみに共感する心を抑圧してしまい、非常に惨いことをすることさえあります。先日の障害者施設で起こった殺害事件。十九人の人が切り殺されました。ぎゃーという悲鳴や、痛い痛いという叫び、助けてという声が起こったといわれていますが、犯人は「障害者は役に立たない迷惑な存在だ。そういう者はいない方がいい」という極めてかたよった観念によって、殺害を実行しました。他者の傷みや苦しみを感ずる心もそういう大きな偏見によつて封じられていくのだと思います。善悪や正義という観念も、他のものの苦痛や悩

みに共感する心を失うと、とんでもないひどいことをしかねないのが人間です。それはナチスのユダヤ人虐殺、共産主義運動の途上で起こった大量粛清、カンボジアでの知識人の大量虐殺など近年にも大きな悲劇は幾つも起こっています。最近では「イスラム国」のテロなどがあります。正当な主義主張は大事ですが、単に知性による善悪の判断だけを主にして暴走するととんでもないことをやりかねないのが人間です。

主義や主張や思想以前に、人がもっている「痛いだろう、つらいだろう、かわいそうだ」と共感するウブな原始感情、それがいつそう大事な心です。凡夫ももっているささやかな同悲同苦の純粹感情、それを育て広げていく、それが教育の根幹だと思っています。仏教の本質は「智慧と慈悲」ですが、他者（衆生）を自己のごとく見たまうのが仏の智慧であり、仏の智慧は衆生の苦しみに共感し大慈大悲としてはたらきたもう。こうした仏の智慧と慈悲に学ぶ、これが仏法を学ぶということでありましょう。

已今当の往生は

(和讃問答)

已今当の往生は

この土の衆生のみならず

十方仏土よりきたる

無量無数不可計なり

(讃阿弥陀仏偈和讃)

現代語訳 (阿弥陀如来のお浄土に過去に往生し、今往生し、将来に往生するものは、私たちの住んでいるこの世の衆生だけでなく、十方の諸仏の国々より往生し、その数は計り知れない)

出典 (曇鸞「讃阿弥陀仏偈」)

「十方仏土の菩薩衆およびもろもろの比丘、安樂に生ずるもの、無量無数にして計るべからず。已生・今生・当もまたしかなり。」

* * *

D 「このご和讃の典拠になるのは曇鸞大師の讃阿弥陀仏偈の言葉ですが、更にその元は仏説無量寿経の経説です。それによりますと、釈尊が弥勒菩薩に

「この世界において六十七億の不退の菩薩ありて、かの国

に往生せん。一一の菩薩、す

でにかつて無数の諸仏を供養

せるなり。次いで弥勒のごと

きの者なり。もろもろの小行

の菩薩、および少功德を修習

せん者、称計すべからざる、

みな当に往生すべし。

ただし我が刹のもろもろの

菩薩等の、かの国に往生する

のみにあらず。他方の仏土も

またまたかくのごとし」

などと説かれています」

N 「無量寿経の経文のこの(不

退の菩薩)とは」

D 「具体的には阿弥陀仏の本

願を信じ念仏申す者のことで

す。本願を信じる時、阿弥陀

仏に摂め取られ、阿弥陀仏か

ら離れなくなります。そうす

ると、もはや迷いの世界には

退転せず(不退)、この人生を

最後として浄土に生まれ仏に

なる、そういう信心の行者の

ことを不退の菩薩といわれて

います」

N 「阿弥陀仏の本願を信じる

だけで、もはや迷いの世界に

転落していなくなるのです

ね」

D 「ええ、それは阿弥陀仏にひとたびであうと、不思議にも阿弥陀仏と離れない関係(摂取不捨の利益)に入ってしまうからです」

N 「阿弥陀仏にはどのようなしてあうのですか」

D 「まずは、南無阿弥陀仏と

お念仏を称えるのですね。口

にお念仏が出るようになれば、

それはもう阿弥陀仏が具体的

に私にであって下さっている

ことになっていきます。あとは

ただそのことに私が気づくだ

けです」

N 「この場合、お念仏はどう

いう意味ですか」

D 「(汝を必ず浄土に往生させ

る)という大悲の誓いがかか

つてるお念仏です。ですから

南無阿弥陀仏を称え聞くと、

「ああ、私のような者を、有

難うございます」と聞き受け

るばかりです」

N 「お念仏を称え聞いても、

なかなかそうは受けとれませ

ん」

D 「それは、自分が煩惱具足

の凡夫であり生死流転の身で

あること、すなわち煩惱(悪)

と死に縛られていて、どうに

もこうにもならない者、出口

のない者であると知れないか

らです」

N 「助かりがたい、救われが

たい私なのですね」

D 「ええ、私は煩惱だらけ、疑いだらけで、真理をちつとも受けいれない者であり、死へといそぐ者であって、しかもそのような現実を自分の力で変えることの出来ない者と、聞かせていただいています」

N 「それほど破綻している私なのですか」

D 「仏のお言葉を聞かせてい

ただきますと、今の自分に確

かなもの、真実なもの、浄ら

かなものがない。あるのは我

執我愛の心、物足りなさやう

ぬぼれや差別心や疑いばかり

で、仏心などはちつともない

者、しかもこの身は死へとす

べりこんで行ききつつある者

と、知らされます」

N 「そうなんです」

D 「そう感じるなら、そんな

私に働きかけ、お念仏となつ

て現れ給い、(汝の悪と死を引

き受ける、助ける)と喚んで

下さる南無阿弥陀仏の仰せを、

有り難うと受けいれる外はあ

りません」

N 「では先ほどの無量寿経の

(小行の菩薩、および少功德

を修習せん者)とは」

D 「小行の菩薩とは、口に出

て下さるお念仏は、阿弥陀仏

が我が口に現れたもう大いな

る大悲の行(大行)であるに

もかわらず、それを私の行っている修行(小行)のように受けとっている者のこと、いわば本願を疑いながら念仏をしていく者のことです。また(少功德を修習している者)

とは、自分の行う善行によつて助かるう、浄土に生まれようと計らう者のことです」

N 「そういう者たちも浄土に

生まれるのですか」

D 「ええ、浄土に生まれるの

ですが、阿弥陀仏の本願他力

をたのまない疑心があります

から、浄土に生まれても、自

らの疑い心に閉塞されて、あ

たかも母親の胎内にいるよう

な、窮屈な閉塞された境界に

留まるのだといわれています。

そういうようにお浄土といつ

てもこの場合は仮のお浄土(化

土)です」

N 「仮のお浄土に生まれると

どうなるのですか」

D 「そこにあつてさらに仏法

のお育てを受け、自らの疑う

罪の深いことを知らされてい

く、そしてついには本願を信

受して真実の浄土に生まれて

させていただくのだと、お聞

きしています。ですからそう

いう自力疑心の念仏者もつい

には真実の浄土に生まれると

いわれます。そういう化土の

往生の者は数え切れないほど多いと仰せられているのです」

N 「ではご和讃の（この土の衆生のみならず 十方仏土よりにきたる）のところですが、十方の仏土というのはどのよう理解したらいいのでしょうか」

D 「理解が及びがたいのですが、仏説では私たちの（この世）も一つの仏土です。それは釈迦牟尼仏の教化される世界という意味で一つの仏土です。ほかに十方といわれるようにあらゆる方角や次元に仏がましまして、衆生を教化される、そういう教化される領域がさまざまにましますので十方仏土といわれるのであります」

N 「多くの仏がましまして、これらの仏が教化される多くの仏土がましますのですね」

D 「ええ、たとえば阿弥陀経にはガンジス川の砂ほどの仏がましますと説かれています」

N 「数限りないほどの仏がましますといわれるのですね」

D 「ええ。この場合ですが、（仏）の意味を広く受けとれば、より理解しやすいと思えます」

N 「仏とは真実に目覚めた方

であると、一般に言われていますね」

D 「ええ、仏とは特殊な名ではなくて、もともと真理に目覚めたお方の意味です。真理に目覚めたお方はそれこそ多数おられたし、おられるし、これからおられるでしょう。ただ釈尊はこの上ない目覚め、（無上覚）を得られたお方です。しかし、無上覚でなくても真理にふれ、真理に気がついたお方はたくさんおられるでしょう。そういうお方を含めて諸仏とか菩薩といわれるのでしよう。こうした仏・菩薩を総称してここでは（仏）と尊称されるのでしよう」

N 「真理に触れ真理に目覚めたお方は仏教徒でなくてもたくさんおられますね」

D 「ええ、そういうお方も目覚めたお方ですから諸仏と言っているのです」

N 「そういう意味ではイエスキリストとかソクラテスなども仏様といえるのですね」

D 「この世のイエスとかソクラテスとか孔子とかガンジーなど名の知られたお方だけでなく、名も無き仏・菩薩は数多くおられたでしょう。現在もおられますし、将来もたくさん出現されるでしょう」

N 「では（この土の衆生のみならず）とありますが、これはどう理解したらいいのでしょうか」

D 「私たちの世界（娑婆世界）だけが世界では無くて、外に多くの世界があり、また私たちの次元を超えた多くの領域があつて、その中の衆生のこ

とではないでしょうか」

N 「私たちの次元を超えた領域とは」

D 「私たちの世界は私たち人間の心のレベルで認識された世界ですから、心のレベル（次元）の内容が変わると、それに応じた世界があるといえます」

N 「今の私には分からなくても、この世以外にたくさん世界があるのですね」

D 「ええ、そう聞きしています。私たちの知性で知れる範囲は少しですから、（不思議だなあ）とそのまま聞かせただいていけばいいのですね」

N 「私たち凡夫の知性ではなかなか伺い知れないのですね」

D 「そうですね。それでもあえて、自然科学的な知識によつて想像してみるのもムダではないでしょう」

N 「それはたとえば、どうい

う話ですか」

D 「今日の自然科学の見方ですと、この宇宙空間は極めて広大ですから、地球以外に有情（心あるもの。生き物）のいる星が当然あると思います」

N 「地球以外に生き物のいる星があるということですね」

D 「なにしろ、私たちのいる天の川銀河の中にある太陽のようないわゆるそれ自身で燃えている恒星は天の川銀河だけでも一〇〇〇億もあるといわれています。またこのよ

うな銀河は宇宙に一〇〇〇億（あるいは一兆個）もあるといわれますから恒星は百兆以上もあることになりま

す。しかも恒星の周りを多くの惑星が回つてるといわれますから、惑星の数は数え切れないほどです。地球も惑星の一つにすぎないのです。ただ地球は惑星の中で、恒星（太陽）との距離が非常に適度な星です。莫大な数の惑星の中には恒星との関係が地球と似たものがあるはずですから、生き物がいる惑星は当然あるだろうといわれています」

N 「百兆の何倍もの惑星があるのですね」

D 「ええそういわれていますね。しかも地球は時間的にあと数十億年もすれば滅びると

いわれています。また逆に、次々と宇宙には星が新たに誕生しています。そうしてみますと、遙か過去にはすでに滅んだ星がたくさんあつたでしょうし、将来誕生する星は極めて多数あるわけですから、その中で地球に似た星が十分有りえるはず

です。また、この宇宙の外にも宇宙があるといわれています。そういう星からの光は私たちのところまで届きませんので観測は不可能です。そんなことこんなことを考えると世界は無数であり、その中に有情（心あるもの）のいる世界はたくさんあると想像されます。その中で真理にふれた有情が誕生し、他の者たちを教化されるのでしよう。そういうお方を仏と呼ぶなら、過去・未来・現在においてガンジス川の数ほどの仏がいて教化される、ということも想像の範囲ですが、考えられないことではありません。あくまでも自然科学的な見方ですが」

N 「どちらにしましても、私たちが感じている今の世界が唯一無二で、外には生き物のいる世界は存在しないと考えるのは、独断であるといえますね」

N 「それはたとえば、どうい

松並松五郎師のことども⑤

N「では、この話はそれくらいにしまして、そのような十方世界（東・西・南・北・上・下）から浄土に生まれてくる者、その数は計り知れないといわれているのですね」

D「浄土に生まれるものは、己今当の往生」といわれるように、己に浄土に生まれた者、今生まれる者、当来（将来）生まれる者を含めていますから、数えきれないほどになるのでしょうか」

N「では、このご和讃や無量寿経のこうした経説は何を言おうとされるのでしょうか」

D「数限りない往生者が生まれる、それほど阿弥陀仏のお浄土は広大にして限界が無いのであるという、お浄土の功德が非常に勝れていることを表されているのだとお聞きしています」

N「では、真理にふれたものは、みな浄土に生まれ往くのであると了解してもいいのでしょうか」

D「阿弥陀の浄土は特殊な狭い世界では無くて、光明無量・寿命無量の広大な真理の領域ですからそのように受けとっていいと、私は思っています」
(了)

松並師のことを思い出すまま、前後も考えずに書いています。

ある時、H師の歌「ふる雪を手に取りみれば 消ゆるなり 空に降らせて 我が物とせよ」という歌に対して、松並師が「どうして我が物とする必要がありますか。降っているだけでよろしいがな」と。

阿弥陀仏の仰せは、聞く私の方でつかまないとばかりか、我が物とする必要もない。ただ仰せをおおぐだけのご指摘でありましょう

松並師は小学校しか出てなくて、一生職人で終わった方ですが、お聖教の言葉を実によく記憶されていました。お話しの中で、すらすらと仏語が出てくるのには感嘆したものです。

また、師は多くの法の歌を作られました。それらは自分で色々考えて作られたものではなく、「突然ひらめくようにして口に出てくるんや。不思議や」とよく言われていました。そんな歌に節を付けて実際に歌われたようです。こ

とに「喚びづめ 立ちづめ

招きづめ 弥陀はこがれてあいにきた そのお姿が南無阿弥陀仏」などは同行からの求めで何度も歌わされたとおっしゃっていました。お酒を飲むとよく歌われたとか。どういふ風な節回しで歌われたのか、おそらく演歌風に歌われたのでしよう。一度もお聞きする機会はありませんでしたが。

なお、松並師は岐阜とか名古屋とかにおられたお念仏のお同行たちのところへよく出かけられ、ともにお念仏を相続し法を語りあわれました。

師の日常生活は、朝はパン、昼はうどん、夜はお酒とおかずというような風で、少食でした。睡眠時間は四時間ほどのブレザーをよく着て人に応対されました。

晩年私が通っていたころは、奥さんはすでに亡くなっておられました。この奥さんとのことですが、結婚の話でびつくりしたことがあります。若いころ、親御さんが松並師に「あんた、あの娘と結婚し

てやってくれないか。あの娘は生活できへんから」と言われ、それで結婚したとのことでした。というのは、奥さんは親戚の方でしたが、やや知能の遅れたお方で結婚が難しく、将来の生活に不安のある方でした。それで松並師の親が「あの娘と結婚してやってくれないか」と頼み、師は親のいわれる通りにハイと結婚されたとのことでした。私も学生時代、奥さんには何度かおあいしたことがあります。

とにかく親の言われることに素直に順うという松並師。この素直さによって、阿弥陀仏の仰せに信順する極めて厚い信心へと熟していかれたのだと思います。

私たちは阿弥陀様の仰せを聞いても、それほど大事と受けとらないでかたわらに置くとか、自分でひねって聞いたり、自分の考えを大事にして、素直になかなか聞かないものです。

自分の思いや考えがいったん砕けてやつと仏様のお言葉が心に貫通するのですが、自分の考えを主にするという橋慢が抵抗して仏様の仰せが容易に通りません。
(了)



【佐々木蓮磨師法味寸言】

一、自分に覚（おぼ）えのないときが、如来様のおはたらきばっかりのところ。

一、如来の勅命が私の安心。自分の胸に信心の沙汰無用。

《秋季彼岸会》

九月二十二日（木）

午後二時始まり

《お知らせ》

十一月六日の共学会（午後七時）は十一月五日に変更いたします。